
Slaughter GAME

ポンジュニア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Slaughter GAME

【Nコード】

N3194Y

【作者名】

ポンジュニア

【あらすじ】

あらすじは、ある一定の話数をこせば書きます。

今書くてネタバレするので^^;

〜プロローグ〜（前書き）

今回は、二作品目です。

初作品もよろしくです。

〜プロローグ〜

Slaughter GAME〜プロローグ〜

『ウウ〜ウウ〜』

時は平成。

この平和な世界にある、一つの小さな家に、ある日不幸な出来事が起きた。

「それにしても、さつきからパトカー多いわねえ。物騒な世の中だわ。まあいいわ。そんなことより、そろそろ始まるころね」

陽気に鼻歌を歌いながら、ソファに座って雑誌を読む一人の女性。

その女性の家庭は、病気で父親を亡くしながらも、母一人で、子供二人を育てている。

父親がいなくとも、その家庭はいつも笑いで溢れていた。

その家の長男、隼人^{はやと}と。長女、紅葉^{くれは}。

三人暮らしの、明るい家庭。

特に裕福ではなく、貧乏でもなく。

どことも変わらない家族だった。

そんなある日のこと。その女性がテレビをつける。

テレビは、現在ニュースを流している。

女性はいつものようにせんべいを食べながら、雑誌を読んでくつろいでいる。

テレビをつけた理由は、この後始まる、ドラマを見る為だ。

いつも30分ぐらい前から、テレビをつけている。

そのドラマのチャンネルは、いつもこの時間はニュース。

本当に理由もなく、聞き流しながらくつろいでいる。

これはその女性の日課だった。

そして今日も。30分間ニュースを聞いた後、そのドラマを見る予定だった。

そう。あの言葉を聞くまでは。

『動物園で、鹿の赤ちゃんが生まれました。その赤ちゃんの名前が　　です。それでは次のニュースです。』

「鹿の赤ん坊なんて、ニュースにするほどの事かしらねえ？」

そういいながら、せんべいを一口かじる。

この平和的ひとコマに、突然衝撃が走る。

そう、このニュースにより、女性の幸せが、一瞬にして壊されたのだから。

『先ほど入った情報によりますと、 県××市の 町で、学生二人が電車にひかれてしまうという事故がありました。事故にあつたのは、如月第一中学校の生徒、武内 隼人くんとその妹である武内 紅葉さんの兄妹で、今現在死亡が確認され 』

「隼人……？紅葉……？」

そう、その女性が愛していた、唯一の家族である、息子と娘。

この日、二人を失った。

「うそ……でしょ？そんなわけないわよ……だって、二人は私の……
…うわああああー!!」

女性は、その場で泣き崩れる。

『プルルル……』

その時丁度、自宅の電話が鳴り響く。

そう、死亡報告の電話だ。

だが女性は、電話を取ることなどしない。

ただその場で、無情にも泣いていた。

そう、この日。一つの家庭が崩壊する。

不幸にも、二人の子供たちを失った。

そう。しかもその日は。

長男、隼人くんの誕生日だったという

〜プログラグ〜(後書き)

これからも、応援よろしくです。

第1話 弱虫 (前書き)

S I a u g h t e r
G A M E

第1話 弱虫

第1話 弱虫

『キーンコーンカーンコーン』

学校終了のチャイムが鳴り、学校が放課後のざわついた雰囲気包まれる。

でも、する事は人それぞれだ。

ほとんどの物は帰宅。でも、友達との雑談でまだ残っているやつらもいる。

チャイムが鳴りだした瞬間に、分厚い小説本を開き、読書を始めるやつ。

先生に呼び出されて職員室に連行されたりしているやつ。

それぞれの放課後は様々だ。

僕といえば、当然帰宅する側の人間だ。

僕は自分のカバンを肩にかけ、ゆっくりと教室を出る。

いつもならすんなり帰れるのだが、今日はそうはいかないみたいだ。

「おうおうおう！隼人ちゃん？ちょーっただけ、俺らと一緒に来てくれないかなあ？」

目の前にはそう、あいつだ。

いつも僕に突っかって来る嫌なやつら。

三人組。

ちなみに、僕という僕は、武内たけうち 隼人はやと。今日14歳の誕生日。

ここ、如月第一中学校の歴とした生徒だ。一応、二年生。

だが誕生日だったのに、僕はつくづく運が悪い。
帰宅途中に、まさかこいつらに絡まれるとはな。

そう、目の前にいるこいつらは、左から順番に。

赤茶色の髪をして、ネックレスやイヤリングなど、チャラチャラつけているのが、猪狩いかり 理俊まなとし。三年の不良だ。

そしてその中央にいる、がたいのいい金髪リーゼントが、威島たけしま 太たい成せい。多分、この三人の中じゃ一番強い。同じく三年。

そして最後に、一番右側のちっこいこいつが、水崎みずさき 弘圭こうけい。この三人の中じゃ一番弱い、いわゆるパシリのポジションだと思う。やはり三年。

不良の世界でも上下関係ってあるもんだね。勉強になります。

「まあ、とにかくこっちに来てもらおうか。ほいっと」

僕は軽々と三人に持ち上げられ、人気の無い所へ連行される。

まあ、それはもちろんいつものあそこだ。今じゃ立ち入り禁止となつているあそこ。そう、屋上だ。

「いたっ」

屋上につくと、僕は軽々放り投げられる。おかげで背中と尻が痛い。

「で、物は相談なんだが？俺達いま金に困ってんのよー。貸してくんなーい？」

なに言つてやがるんだよ。いつも僕から捲きあげているじゃないか。

そう、僕は週に一回のペースで巻き上げられる。おかげで小遣いがない。

「で？くれるの？くれないの？ねえ、隼人ちゃん？」

さっきから喋っているのは、がたいの良い威島だ。

なにが貸してくれだよ。返したことなんて一度もないくせに。これじゃカツアゲだ。

「あ、今日は、その、誕生日だから見逃してもらえないかなー、なんて……」

僕は言った。

そう、これで気づいたと思う。僕は弱虫だ。

勉強もダメ。運動もダメ。いわゆる落ちこぼれ。

そんな僕がこいつらに立ち向かえる筈がない。何やってもダメ。これはもう決まっている事。

神様なんていやしない。強い物が勝ち、弱い物が負ける。

たとえ強い物が間違っていて、弱い物が正しいとしてもだ。

僕たちはしょせん、神様の手の上で転がされている。

だから、努力や根性などではどうにもならない。

そう、生まれた時からその人の運命はきまっているのだ。

僕は、こつやつて脅されて。

バカにされ続けて生きて行く人間。

こんな僕が頑張った所で、アリー一匹始末できないだろう。

いや、出来る事には出来るんだが。

そう、たとえばの話だ。たとえばね。

だから、僕は無駄な努力はしない。

ただ黙って、言う事を聞いていればいい。

そうすれば、自然と上手くいくのだ。

「ほら、さつさと金出せよ!!」

「うぐっ、ゴホッ!!」

そう言って、威島が僕の腹を蹴る。

その衝撃で、思わず咳込んでしまった。

僕はなんて情けない奴だ。

一発蹴られただけで、涙が止まらない。

痛い。怖い。

僕は早く解放されたくて、財布を渡す。

「へっ、さつさと出せばいいんだよ!このクズが!!」

また蹴られる。

今度は三人がかりで。

僕を袋叩きだ。

でもこれはいつもの事なんだ。

五分程度我慢すれば、アザができるだけで済む。

僕はいつもこう。

僕は、
こういう人間だ。

続く。

第2話 惨め (前書き)

S
I
a
u
g
h
t
e
r
G
A
M
E

第2話 惨め

第2話 惨め

『ゴキッ』『バキッ』『ドゴッ』

リズムカルに音が響く。

痛い。怖い。

体が震える。

「このグズが！」

『ボクッ』

鼻先に熱いような痛みと共に、鉄の味のある赤い何か垂れる。

容赦ない蹴り。

僕はいつもこう。

みんなに殴られて、蹴られて。

必死に痛みを耐えることしか出来ないひ弱な人間。

抵抗する事もせず、ただただ殴られるだけのサンドバッグだ。

授業になり、教科書を広げれば、『死ね』とか『クズ』とかいじめにはよくあるひどい単語が、でかでかと視界に入ってくる。

昼はいつもトイレの個室で、あの嫌な匂いの中、一人でもそそと食べる。

かばんには、生ゴミやら泥やらが入れられる事は毎日。

僕には、すべての不幸の神様がとりついていてみたいだ。

「なあ？こいついつもずっと黙りっ放しで、ムカつかねえか？」

「ああ。たにかになっ！！」 『ボクッ！』

は、鼻が……

「そうだろ？だから、こいつを使おうぜ？」

こいつ？

僕はゆっくりと、『こいつ』といわれている物に視線を移した。

それは、長く、太陽の光でキラキラと黄金に光る、野球なので使われるあれだった。

それを持った威島が、僕のほうに向かって歩いてくる。

「ケホッ……そ、それは危ないんじゃないかと思うんですが」

涙目の僕。

『へへへ』と、不気味に笑いながら、威島が近づいてくる。

ねえ。嘘でしょ……？

そんなもの振り上げて、もし当たったら危ないよ。

怪我をするだけじゃ済まないよ。

ねえ！ちよつと！…！

威島が、金属バットと思われるそれを、豪快に振り上げ……

「生意気なんだよつ！…！」

振り下ろす。

『ゴキッ！…！』

「っ！？」

声がでない。

脇腹に激しい、鈍いような痛み。

やばい。骨折れたかもしれない。

叩かれた所を押さえ、うずくまる僕。

やっぱり神様なんていなかったんだ。

僕はもう、生きているだけの人形。

みんなに遊ばれて、最後には捨てられるだけの……

「どうしたあ？痛みで声も出ないか？この人間のクズめ！！」

『ドコッ』

倒れている僕に、容赦なく振りかざす威島。

「ウグッ！！」

いっそ、このまま死ねたらどんなに楽か……。

僕はもう、抵抗はしなかった。

抵抗した所で無駄なのだから。

「おい、もうやり過ぎじゃないのか？」

誰かが止めている。

でも僕は、もうどうでもよかった。

もうどうにでもなってくれ。

僕は静かに目を閉じる。

「こいつ、もう動かねえよ」

「も、もしかして死んだ？」

「そ……そんな事はないだろ。だって俺もそれなりに加減してたし……」

僕の肩を、何かが押した。

「お、おい、生きてるかー」

どうやら、誰かが僕の体を揺すっているみたいだった。

へへっ、ちょうどいいや。

このまま困らせてやる。

このままずっと黙る。

それぐらいなら、僕にだってできるよ。

「おい……マジでやべえんじゃねえか？」

だんだんと、声が焦りだしている。

どうだ。ざまあみる。

「……おい、ちょっと待て。こいつ、もしかして俺達を困らせようとしてんじゃないかねえのか？」

威島の声だ。

妙な所で鋭いやつ。

「……………よつと」

威島が、僕を担ぎ始めた。

え？ちよつと？なにをするの？

どこへ連れて行く気なの！？

「おい隼人。お前、早く起きないとここから突き落とすぞ！！」

「ああ、そついう事が」

「さすが威島」

そつ声が聞こえる。

見なくても分かる。

多分僕は、屋上の一番端に寝かされている。

つてかうそでしょ！？

危ないって。

「三秒以内に、答える」

……………答えるもんか。

「3」

威島のカウントが始まる。

「2」

絶対に答えるもんか。

意地でも答えないぞ。

こうなったら、とことん黙りとおしてやる。

「1」

怖くなんかない。

僕は怖くなんか……

「0。時間切れだ。ほら、早くしないと落ちるぞ?」

足で、僕の体を押してくる。

するとその時、僕の顔に下から押し上げてくる風が吹きつけてきた。

もうギリギリなのだ。

……やっぱり無理。

死ぬのは怖い!!

「起きた！！ほら起きた！！ばつちり生きてるよ！！！」

僕は必死に答えながら、体を起こす。

起こした反動で、殴られた所がズキズキ痛んだ。

「やっぱり生きてたか、カスが！！！」

僕をつかみ上げ、屋上の真ん中あたりまで行き、放り投げる。

そして、また袋叩きだ。

そう、僕は弱虫。

強気になっても、結局負ける。

怖さにも勝てず、何にも出来ないただのボロ人形。

多分この先もきつと、僕はこのまま生き続けるんだろう。

続く

第3話 紅葉 (前書き)

S I A U G H T E R G A M E

第3話 紅葉

第3話 紅葉

僕が袋叩きにあっている時だった。

『コツコツ』と、階段を上がる音が聞こえた。

そして、それが僕のいる屋上までやってきた。

「こらあー！なにやっとするか！！！」

担任だ。

担任が来たのだ。

そのおかげで、不良たちは僕から離れ、担任の横を通り抜けてすぐに逃げて行く。

担任はそれらに構わず、僕のほうに歩いて来て言った。

「武内いー。困るんだよねー。騒ぎを起こされるとね。もう二度とクズはクズなりに、大人しくしてもらいたいんだよねー。騒ぎを起こすクズと、大人しく泣きわめくクズ。同じクズなら、大人しい方がいいんだよねー。じゃ、そういうわけだから。トイレ掃除一月やってね。罰として。」

そう言い残し、担任は階段を下りて行く。

いつもそうだ。

自分が不良たちが怖いからと言って、すぐ僕のせいにする。

学校中が、僕の敵だ。

「いってて」

僕は、ゆっくりと身体を起こす。

ボコられた所がとても痛む。

「僕はクズなんかじゃないぞ。周りがクズなんだ」

僕は、痛めた所をさすりながら、鼻血を手でぬぐう。

それにしても、金属バットまで使うなんて。

今日は僕の誕生日だから、神様からのプレゼントかもしれない。

そう、不幸の神様からの。

するとその時、屋上のドアが開く音がした。

「お兄ちゃん。またやられたの？」

階段から、僕の目の前にやって来る少女。

このショートで赤茶色の髪をした、ちよっと癖っ毛のある少女は、
武内たけうち 紅葉くれば。

僕の妹だ。

僕と一つ違いで、今はまだ12歳。

今年の12月が誕生日だ。俗に言う、遅生まれという奴だろう。

同じ学校に通う、中学一年生だ。

「そういう紅葉こそ、びしょ濡れじゃないか。大丈夫だったか？」

「あ、うん。私は平気だけど、お兄ちゃんが……」

「心配するな！お前の兄貴だぞ！」

強がり。

妹の前では、いつも強がってしまう。

だけどそれはそれで嬉しい。

僕にもまだ、強がれる相手がいるという事なのだから。

「紅葉。ホントにごめんな？僕のせいだ」

「……うん。私は平気だよ」

その顔は、明らかに平気ではない。

平気なはずはないんだ。

こんな不幸まみれの僕に、いつもついてきてくれた紅葉。

見捨てることだってできるはずなのに。

正直、こんな僕の為に傷ついてほしくはない。

紅葉には、もっとやりたいことが山ほどあるに決まってる。

僕の妹だという事だけでいじめられ、それでも僕に優しくしてくれる。

そんな紅葉の優しさは、今の僕にはとても辛い。

僕のせいでこんな事になってしまっている。

僕はもう、生きていても何の意味もない。

みんなを不幸にするだけ。

でも、死ぬ勇気が僕にはない。

だから今ものうのうと生き延びてしまっているのだ。

「とりあえず、帰ろう」

今は放課後だ。

帰る時間。

家に帰れば、漫画にゲームにテレビなど、楽しい事が待っている。

それに今日は僕の誕生日だ。

母さんも、ごちそうを作ってくれてるって言ってたし。

やっぱり誕生日は良い日だね。

「お兄ちゃん。ケーキ買いに行かないと」

「あ、そうかしまった！」

僕がお金を預かっていたんだった。

すべてカツアゲられたんだよなあ。

「また……なの？」

『また』とは、カツアゲの事だ。

「あ、えつと、ははは。あんな奴ら！余裕で倒せるんだけどね！僕は弱い者いじめが嫌いだからさあ」

僕は誰にいいわけをしているんだよ。

……そんなのは分かっている。

情けない自分にだ。

僕はとことんダメ人間。

立ち向かう勇気すらなく、強がりばっかの人間。

そんな僕に、紅葉は言った。

「お兄ちゃん。私には本当の事言っただっていいんだよ……？」

「な、なに言ってるんだよ紅葉？僕は平気。確かに少しばかり弱虫だけど、このくらいじゃ平気だよ！」

凶星を突かれて、必死に言い訳を始めた僕。

なんて情けない。

「とりあえず、ケーキは私が払うから、一緒に帰ろうよ」

「……紅葉、別にケーキは良いよ。紅葉が好きな物でも」

「よくないよ！食べたいじゃん！！私がっ！！」

「紅葉が食べただけかよっ！！」

「とうぜんよ！お兄ちゃんの方は無いからね！」

なんだよ。

紅葉の優しさを感じての、僕の感動を返してくれ。

「もう、良いから帰るよ！ケーキ屋寄ってから！！」

「くっくっく」

そんな感じで僕らは、
帰るために学校を出たのだった。

続く

第4話 悲惨 (前書き)

S
I
A
U
G
H
T
E
R
G
A
M
E

第4話 悲惨

第4話 悲惨

「へっくしっ！」

大きいくしゃみをする紅葉。

「大丈夫か？風邪引くから早めに帰ろうな。」

「あ、うん」

ずぶ濡れの紅葉。

そう、僕のせいで、クラスの人たちに水か何かをかけられたんだと思う。

替えの服など持っている訳もなく、今も濡れたままだ。

紅葉が歩くたび、水滴が地面へと落ちる。

それほどに濡れている。

これはケーキどころじゃない。

「紅葉？一回帰ってから、買いに来ないか？」

別に今買わなくちゃいけないわけでもないしね。

「でも、ケーキ屋はちょっと道違うけど通り道だよ？」

「そういうのは通り道とは言わないの！」

「でも近いし……」

「いや確かに近いけどさ。でも紅葉が」

「私は大丈夫だよ！ほら、ケーキ屋行くよ……！」

「……わかったよ、急ごう」

「分かればよろしい！」

僕は紅葉に負け、しぶしぶケーキ屋へ向かう。

学校から家へは徒歩15分。

ケーキ屋に寄ってからだと、大体20分だ。

大体家から学校への道は、一直線。

曲がる場所などはない。

なので、とても覚えやすい道筋といっても良いだろう。

ケーキ屋に行くには、途中で曲がらなくちゃいけないのだが。

まあ、そんなには変わらない。

「お兄ちゃん！ケーキ屋さんはこっちだよ？」

「ああ、ごめん。ボーっとしてた」

「いつもボーっとしてるから転んだりするんだよ!」

む？それは違うぞ紅葉くん!!

「そんな事はないよ。僕には不幸の神様でもとりついているんだ。じゃなきゃこんなに不幸な目に合うわけが…うわっ!!」

「ほらっ！ボーっとしてるからでしょー」

「いってて。うるさいな紅葉は」

道に転がっていた空き缶を踏み、僕は滑って転んでしまった。

そしてそれを見た紅葉は、笑いながら生意気に言ってくる。

ホント、なんてついていないんだ僕は。

転ぶのは毎日。

それも一回や二回ではない。

不良には良く絡まれるし、近所の犬にはよく吠えられる。

裁縫などをすると必ず指を刺すし、跳び箱した時なんか、顔面からの着地。

それ以外にも、色々な事が僕には起こる。

たぶん、普通に暮らしてしている失敗は、すべて体験したと思う。

「ほらっ、手につかまりなよ」

そう言っつて、紅葉が手を差し出してくる。

僕は、その手をつかみ、立ちあがろうとしたのだが。

「あ、ありがとう……うわっ!!」

「ちょ、うわっ!!」

「うっ!!」

紅葉の手が濡れていて、華麗に再び転んだ。

さらには、紅葉も転ぶ。

僕の上に。

「いたっ!!!!」

紅葉が、どうやらぶついたらしい膝をさすっている。

「痛いのは僕のほうだよ!どう転んだら、僕の鳩尾みぞおちに肘鉄をくれられるんだよ!!」

そう、紅葉が転んだときに、僕の鳩尾に、紅葉の全体重を乗せた肘鉄が入った。

思わず口から何かでそうだったよ。

「ひどいよ！…こんな可愛い女の子を引つ張り倒しておいて、それは無いんじゃないの!？」

「なにが引つ張り倒してだよ！…人様がきいたら誤解するよ…うな……」

『あらやーねー。近頃の学生はこんな所で……』
『そうよねー。』

ああ、不幸すぎる。

「……あはは。誤解されちゃってるねー」

「されちゃってるよ！紅葉が変な事言うつからされちゃってるよ！…！
てか、そごどいてー！」

「お、ごめんごめん」

紅葉が、やっと僕の上からどいてくれた。

まったく。紅葉のせいで、また変な印象がー！…！

「とりあえずいくよ！…！」

「わかったよ」

僕は紅葉に言われて、ゆっくりと立ち上がる。

そして、紅葉と一緒に歩き出した……かったのだが。

「うわっ！……いってー！……！」

先ほどの空き缶に、また足を滑らせる。

「お兄ちゃんって……実はお間抜けさん？」

「っ……！」

なんで僕は、こんなについていないのだろう。

自分の事が嫌になって来る。

僕は、再び立ちあがり、あの空き缶を拾う。

「こんな物、飛んでっちまえー！！！」

僕は投げた。

『コンッ』

『カンッ』

目の前の木に直撃し、僕の頭に帰ってきた。

「いってー！……！」

続く。

第5話 岬巴 (前書き)

S I a U g g t e r G A M E

第5話 岬巴

第5話 岬巴

Slaughter GAME

第5話 岬巴

投げた缶が木にあたり、そしてはねかえって僕の頭にあたる。

不幸すぎる。

なんで僕はこんなにも運がないんだろう。

今日誕生日なのになー。

「あ、お兄ちゃん！ほら、あそこだよ！……つくしゅん！……」

「ちょっと、風邪でも引いた？勘弁してくれよー」

「大丈夫！風邪は引いても心は無敵だから！……」

「意味が分からないよっ！……」

まったく。紅葉はいつも適当な事ばかり言っただから。

「あー？今私の事馬鹿にしたでしょー？」

「ししし、しししし、してないよ！……」

「お兄ちゃん、ウソ下手すぎ」

紅葉が、僕の事を何かバカにしている目で見ています。

失礼だぞ。僕だって動揺したくてしている訳じゃないんだ。

凶星を突かれたら、嘘や隠し事が出来ない、正直な人間なんだよ。

「お兄ちゃん！！早く来てよー！！」

僕の必死な脳内の言い訳をスルーし、ケーキ屋の前に立つ紅葉。

紅葉、足早すぎ。

さすがわが妹。

「お兄ちゃん遅いよー！！おばあちゃん並みだよー！！」

「失礼な！せめておじいちゃんですよー！！」

「遅いのは認めるんかい」

ああそうですよ。

どうせ僕は遅いよ。

運動も苦手だし、勉強だって得意じゃないし。

人よりすごい所があるとすれば、この悪運っぷりのみだよ。

でもあれだ。遅いのはこの大きいかばん持ってるからだよ。

そうに違いない。

あ、いい忘れていたけど、僕は普通の授業用かばんのほかに、いじめ対策用のかばんをいつも用意している。

とても色々な作戦だって考えた結果、この大きいかばんになってしまった訳なんだよ。

でもいざとなると、仕返しが怖くて一つも使えなかったけどさ。

「お兄ちゃん！早く入るよ！！私が風邪をひいても良いの!？」

感情の入っていない怒った声。

「うん。僕は構わない!!」

「はっくし!!」

冗談抜きで、本当に風邪ひいたんじゃないの？

「ちよ、本当に大丈夫？」

すると、紅葉がニヤニヤしながら言った。

「なんだ、やっぱり心配してんじゃないか」

こいつ。

わざとくしゃみしやがった。

……でも、やっぱり、紅葉といると心が安らぐ。

多分僕は、紅葉がいるから。

紅葉の優しさがあるから。

多分死にたくないのだと思う。

怖いだけじゃなく。いや、怖いのだ。

紅葉の優しさを、もう感じられなくなるのが。

紅葉のおかげで、いつも元気を取り戻せる。

「とりあえず、紅葉は外で待っててよ。濡れてるんだから」

「えー」

「えーじゃないよ。いつものでいいんでしょ？僕が買って来るから。そこで待っててよ」

ちなみに、紅葉はいつも苺のショートケーキ。

それ以外はなぜか食べない。

「僕が買ってくるって、お金なくちゃ買えないでしょ？ほらこれ」

紅葉が、オレンジ色のクマの絵が書いてある財布を、僕に差し出す。

そうだった。僕はカツアゲされたんだっけ。

今無一文だよ。

「うん。ありがとう」

僕はそれを受け取り、ケーキ屋に入っていく。

後ろを見てみると、紅葉がガラスに張り付き、僕を監視している。

そんなに見張らなくても大丈夫なのに。

僕だって、買ったケーキを持って転ぶなんて、そこまでドジな事はしない。……と、思う。

「隼人くん。お誕生日おめでとう」

「あ、ありがとうございます。えっと、いつものやつください」

毎年誕生日になると同じ物を買うので、もう僕は常連のようなの。

誕生日以外でも、たまに買いに来たりもしているけど。

そして、このレジのお姉さんとも、仲がいい。

「はい、今日はおまけしてあげる。だから、へこたれちゃダメよ？」

「あ、本当にありがとうございます。岬さん」

この若い、綺麗な茶髪のお姉さんは、岬みさき 巴ともえさん。

僕の事をよく理解してくれて、いつも優しくしてくれる人。

家族以外で、唯一僕の事をバカにしない人だ。

「隼人くん。男の子なんだから、守られてばかりじゃなく、ちゃんとしつかり紅葉ちゃんを守ってあげなさいよ？男は勇気だ！ドーンとぶつかって行きなさい！！」

「……はい！」

僕はそんな岬さんな言葉に、元気を貰ったのだった。

続く

第6話 神社 (前書き)

S
I
a
u
g
h
t
e
r
G
A
M
E

第6話 神社

第6話 神社

岬さんは、いつも元気づけてくれる。

もう、僕の気持を見抜いているかのよう。

岬さんの言葉には、不思議な力がある。

岬さんに言われると、なんだって出来ちゃうような不思議な感じ。

何でなのか。多分、僕のことを真剣に考えてくれているからだ。

だから、僕も頑張れる気がする。

だから、僕は明日も頑張ろうって気になるんだ。

岬さんは凄いや。

「ありがとうございます」

僕は岬さんに、少しだけ元気をもらい、ケーキ屋を出たのだった。

ケーキ屋から出てきた僕を、紅葉が呆れた表情で睨みつけてくる。

「えっと、紅葉さん？顔が怖いんですが……」

「なにデレデレしちゃってるのかなー？変態お兄ちゃんめ」

へ、変態！？

「な、なにを言いだすんだよ！！変態じゃないから！けして変態じゃないから！！」

「ちよつと！わかったから大きな声で変態を連呼しないでよ！恥ずかしいなあーもう」

顔を赤くして、必死に僕をなだめる紅葉。

なんだよ。元はといえば紅葉が言いだした事じゃないか。

「……じー」

……。

「じー」

「……今度はなに……？」

紅葉が『じー』と言いながら、僕を見ている。

とても気になっちゃうね。

「べつにー？否定するのは変態だけなのかなあーと思ってねー」

ん？どついう意味だろう。

良く分からない。

うーん。

僕が考えていると、紅葉が言った。

「まあーいいけどねー。私には関係ないしねー」

「さっきからなんだよ！どついう意味なの！？」

「さあーねー」

わざとらしく、とぼける紅葉。

いったいなに？

……あ、わかった。

新手のいじめ？

いやそんなわけない。

えー？なんだ？

よくわからんやつちな。紅葉は。

「分かんないならもう知らない！ほら、ケーキの箱貸して！お兄ちゃんに持たせると絶対だめになるから！」

本気で悩んでいる僕を見て、急に不機嫌になる紅葉。

僕の手から、ケーキの箱を無理やり奪い、歩き出してしまった。

「紅葉ー！なに怒ってるんだよー！！」

「お兄ちゃんは巴さんと仲良くしてればいいでしょー！！」

怒りながら、ひたすらに歩いて行ってしまおう紅葉。

巴さん？

……あー！あの事が。…って。

「僕はデレデレなんてしてないよっ！！」

やっと紅葉の言っている事が理解できた僕は、一応ツッコんでおく。

でも、まだ紅葉はツンツンしたままだ。

まったく。紅葉のやつ。

とりあえずおいて行かれそうなので、僕は紅葉のもとに走った。

紅葉の隣につくと、頬をふくらませ、わざとらしく怒っている。

……ああ、やきもちね。

なかなか可愛い所もあるじゃないか。

そうかそうか。

なら、からかわない手はないよね。

僕は、一人で勝手に納得し、紅葉に言った。

「なんだ紅葉。やきもちか？これがやきもちというものなのか？」

僕は調子に乗り、ニヤニヤしながらからかう。

「やきもちか。とうとう紅葉もそんな年頃になったんだね。」

すると、紅葉の顔が真っ赤になり、とうとう怒りだした。

「お兄ちゃんうるさい！！誰に似たのよ！そのしつこさ！！」

「うりうりー。正直に言えよ。岬さんに嫉妬してるんでしょ？」

「あー、最悪だー。お兄ちゃんが気持ち悪いよー。」

「気持ち悪くないよ！！失礼だね紅葉！！」

まったく。紅葉ときたら、心に突き刺さる言葉を平気で言うんだから。

「とりあえず、寒いし急いで帰ろうよ」

あ、そうか、紅葉はずぶ濡れなものね。

せつかくの僕の誕生日なのに、風邪引かれたら困るよ。

紅葉は、元気だからこそ紅葉なんだ。

「じゃあ、走って帰る？」

「いや、歩き。ケーキが崩れちゃうから」

「あ、そうだね。ゆっくりと急いで帰ろう」

紅葉は、小さく頷いた。

それから五分後。

僕たちは、神社の前を通りかかる所だった。

この辺りで、唯一の神社。

名前は、ええつと、なんだったっけかな？

初詣なんかには、みんなでここに集まるらしい。

『らしい』のというのは、僕たちは初詣は行った事がない。

理由は……、いじめられるのが怖いからだ。

当然、学校にいる奴らも来るに違いないから。

いや、それは僕だけかもしれない。

紅葉は、行きたいのかもしれない。

でも、僕の事を思って、一緒に行かないでくれているのかも。

だって……その日になると、いつも寂しそうだから。

続く

第7話 優しさ (前書き)

S I a U g g r t e r G A M E

第7話 優しさ

第7話 優しさ

「お兄ちゃん。どうかしたの？」

僕が立ち止まって神社を眺めていると、紅葉も立ち止まり、不思議そうな顔で聞いてきた。

「あ、いや、別に……そ、そうだ！せっかくだし、お参りしてみない？」

別に特に意味はないが、ただなんとなく言った。

本当に意味なんてない。

すると紅葉は、考えるそぶりも見せずに頷いた。

僕たちはゆっくりと、賽銭箱の前に立つ。

「……はい、お兄ちゃん。お賽銭」

紅葉はケーキの箱を地面に置き、自分の財布から五円玉を二枚出し、一枚を僕に差し出す。

「く、紅葉。本当にごめんな？こんな不甲斐ない兄貴で……」

ホント、情けなさすぎて泣けてくるよ。

「気にしないでよ。確かに不甲斐ないけどね」

「そこは『駄目じゃないよ』って、優しく言う所でしょ!？」

「はいはい、駄目じゃないよー。いい子でちゅねー」

「バカにしてるじゃん!……って、そういえば、紅葉に一つだけ言っておくよ」

「なに？」

紅葉は、興味がありそうに聞いてくる。

「神様に誰かの幸せを願うと、その分自分に不幸が帰って来るらしいよ?」

なぜそんな事を言い出したのか。

紅葉は分かったようだった。

だから僕は、そんな紅葉に一言告げた。

「だから、自分の為になる事をお願いした方がいいよ。僕の事は、僕が自分でお願いするからさ。」

紅葉の事だ。絶対に、僕のいじめがなくなりますように。とかお願いするに決まっている。

紅葉にそこまで迷惑はかけられない。

すべては、僕が弱いからいけない事なんだ。

「お兄ちゃんはなにをお願いするの？」

紅葉が聞いてきた。

僕は一瞬答えるのに困ったが、すぐに優しく紅葉に言った。

「誕生日だからね。母さんから、良いプレゼントを貰えますように
つてね」

……実を言つと、これは嘘だった。

僕が願いたい事は一つだけ。

『紅葉の幸せ』だ。

僕の為に不幸になんてなってほしくない。

いつも、僕の事を守ってくれる紅葉。

多分紅葉は、中学生の女の子らしい事は一つもしていないと思う。

友達と買い物に行ったり、カラオケ行ったり、どこか食べ行ったり。

中学の時だけじゃない。

小学校、いや、幼稚園からそうだった。

普通の人たちみたいに友達と遊ぶことなく、いつも僕のそばにいて
くれた。

たくさんの不満があると思うのに、文句の一つ言わずにずっと、僕を支えてくれた。

僕がもうだめだと思った時、必ず傍にいたのが紅葉だった。

そんな紅葉に辛く当たった時もあった。でも、それでも見捨てたりなんかしなかった。

僕が辛いときに、いつも優しい言葉を投げかけてくれていた。

自分だって、辛い時もあったらろうに。

こんな……僕の為だけに……。

「お兄ちゃん……泣いてるの……?」

紅葉が、心配そうに僕の顔を覗き込んでいる。

「え……?」

紅葉に言われて初めて気付く。

僕が涙を流していた事に。

「えっと、ああ!これね!!!ご、ゴミがね?ほら、あれだよ!!!ゴミが目には猪突猛進と言うかなんというかね!とと、取り合えず平気だから!!!」

いつも強がっていた紅葉に泣いている所を見られ、とてつもなく恥ずかしくなり、顔を赤くしながら必死にごまかす僕。

最悪だよ！

泣き顔を紅葉に見られちゃったよ！！

うおー！！！！やばい！！死にたい！！！！兄としての威厳が崩れて行くー！！！！！！

「……お兄ちゃん、ありがとう」

「へっ？紅葉なんか言った！？」

「ぶっ、なんでもないよー」

とても慌てふためいている僕に、紅葉が何かを呟いた気がした。

でも、なんて言ったかまでは聞き取れなかった。

……だけど、その時の紅葉に表情が。

ほんの一瞬だけだけど。瞬きほどの一瞬だけ。

紅葉のとても寂しそうな表情を……僕は見てしまった。

続く

第8話 祈り (前書き)

S
I
A
U
G
H
T
E
R
G
A
M
E

第8話 祈り

第8話 祈り

「お兄ちゃん！早くお願い事しようよ！」

紅葉は、とても元気そうだ。

さっきの寂しそうな顔はなんだったんだろう。

やっぱり紅葉、僕に遠慮しているのだろうか。

僕が自分の事でいっぱいいっぱいだから。

「お兄ちゃん！聞いているの!？」

「うおっ!!きききき、聞いている!バツチリ聞いちゃってるよ!」

いきなり大声を出され、とても驚いてしまった。

……とりあえず、考えるのはよそう。

紅葉ももう子供じゃない。

大丈夫だ。

「じゃあ紅葉。このお金を、ここの中に投げ入れて……」

そう言って、賽銭箱に軽く投げ入れた。

すると紅葉も、続けて入れる。

「そしたら、この紐を揺らして、鈴を鳴らす」

『ガランガラン』と、神社特有の鈴の音が鳴り響く。

ちなみに、神社には小さい頃に数回来たことあるだけ。

それも、とても小さいころだ。

多分紅葉は覚えていないと思う。

なにしろ、僕がうつすらとしか覚えていないのだから。

だから、分かっているとは思うがやり方を教えている訳だ。

……そんな目で見ないでいただこうか。

たまには兄貴ぶりたいんだよ。

いいでしょ別に。

「で、鈴を鳴らしたら、神様をお願いするだけだ」

「うん」

そう言って、僕と紅葉は、静かに目を閉じ両手を合わせる。

……『紅葉が、安全に。いじめもなく、差別もなく。普通の女の子として、毎日を楽しめますように』

僕はそう願う、静かに目を開く。

隣では、紅葉がまだ祈っている。

しばらく見ていると、どうやら終わったようだった。

地面に置いてあったケーキの入っている箱を、優しく拾い上げる紅葉。

「じゃあ、帰ろっか！」

紅葉が笑顔で言った。

その笑顔は、まるで天使のような。

僕の心を一瞬にして洗い流してくれるような。

そんな笑顔に、自然と顔がほころんだ。

「うん。帰ったら誕生日パーティーだからね」

そう言って、僕たちは神社をあとにした。

誰もいなくなった神社。

誰もいない、静かな神社の一番奥。

神様が祭られている場所で、小さな一つの光と共に。

神社一帯に、生温かい、夏の怪しい風が妖々と吹き荒れる。

木の葉が舞い、砂埃があがる。

そして、怪しく囁く。

【ふふっ。面白い兄妹だ。いい暇つぶしになりそう】

そして、一つの小さな光が消え、風がおさまる。

もちろん、そこには誰もいない。

ただ声だけが、聞こえたのだ。

でもそんな事など、あの兄妹が気付く訳もなかった

「お兄ちゃん！早く帰ろうよ！！ケーキが冷めちゃう！！！！！！」

紅葉の目がきらきらしていいで、よだれを垂らし、意味不明な発言をしている。

実に見苦しい。

女の子なんだから、よだれを垂らすのはやめてもらいたい。

これは兄として一言だけ言っておくべきだろう。

「紅葉！ケーキは僕のものだよ！！」

そもそも、僕の誕生日だ。

僕が食わなくてどーする。

「お兄ちゃん！ツッコむ所はそこじゃないよ！」

なんだ。ツッコミ待ちだったのか紅葉は。

でもしょうがないよ。僕のケーキがかかってるんだもの。

いくら僕でも、そこは譲れない。

その時、紅葉が指をさして言った。

「ほらお兄ちゃん！！あの 線路 を渡ればすぐ我が家につくよ！！！！」

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3194y/>

Slaughter GAME

2011年11月17日12時40分発行